

京内最大の井戸と中から出てきた大量の^{ひとがた}人形

平城京^{ひらけい}京一条三坊十三坪 奈良市法華寺町

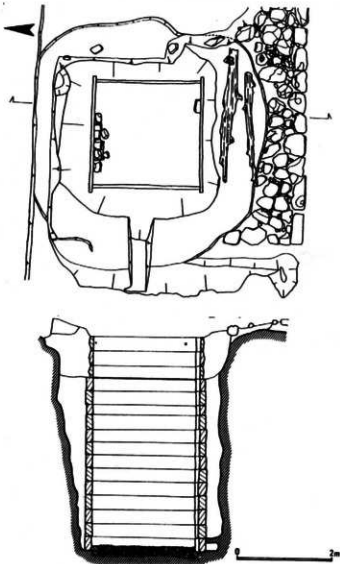
調査の概要 調査地は平城京条坊復原では左京一条三坊十三坪にあたります。これまでの周辺の調査によって十三坪と北の十四坪とは一括して一つの宅地として利用されていたと推測されており、この坪にはかなり位の高い貴族が住んでいた可能性が考えられていました。今回の調査で見つかった遺構には、^{ほつたてしらたてもの}掘立柱建物跡5棟、^{ほつたてしらたてもの}掘立柱礎跡6条、井戸1基、石敷がありますが、これらの発見は調査前の予想をはるかに上回る成果となりました。

掘立柱建物のうち最大のものは南北6m、東西24m以上の建物で、一般宅地にはあまり見られない大きさです。

そして今回発見された井戸は、^す枠を据える穴の直径が6m以上もあり、井戸枠は約2.2m四方の非常に大型のものでした。この大きさは平城京で宮内のものを除けば最大であり、深さ4.6mという遺存状態と併せて見ればその規模は過去最大と言えるでしょう。井戸枠は井籠^{せいろう}横板組みと呼ばれる組み方で、横板は全部で64枚残っていましたが、一枚の長さが2.5m、幅30cm、厚さ15cmもあります。これだけの材木を調達するためには相当な権力が必要だったと考えられます。また井戸の周囲には人頭大の河原石を用いた石敷が広がっていました。大半は壊されていましたが、一辺約7mの正方形に敷かれていたと推定されます。この井戸は9世紀初め頃造られ、廃棄後はゴミ捨て穴に利用されて、10世紀初め頃に埋まってしまいます。都が平城京から平安京に移った後に、誰がこのような大型の井戸を造ることができたのか、大変興味深い問題です。



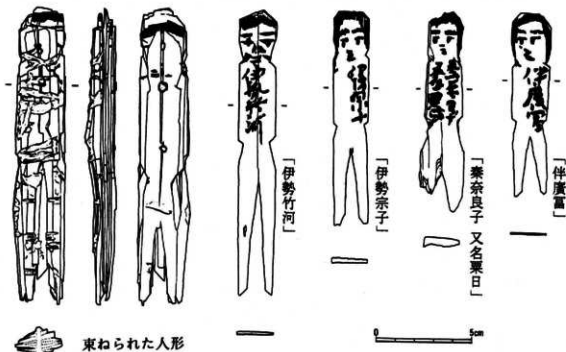
調査位置図 1/20,000



井戸の平面及び断面図 1/80

井戸に捨てられた人形 今回見つかった井戸の中からは実に様々な遺物が出土しました。土器や瓦はもちろん、人形・曲物・杓子・下駄・草履・鉄鍬・鉄斧・銭等のほか、馬や鹿の骨もありました。土器の中には墨で文字の書かれたものも多く、また緑釉陶器や輸入青磁もあります。これらのうち特に注目されるのが人形で、出土枚数は94枚以上におよびます。人形とは、薄い板を人の形に似せて切り、墨などで顔を描いているものです。今回出土したものは全て頭・腰・足の表現を施し、腕は省略された形態のもので、胴部には人名が記されています。井戸の中からこれだけ大量に人形が出土した例は初めてで、しかもその出土状態は非常に珍しいものでした。100枚近い人形のうち約半分は、7・8枚ずつ束にされ紐や木釘で纏められていました。全部で8束見つかりましたが、完全に一束となっていたものは2組だけで、他は束がほどけて数枚ずつ抜けているようです。この束ねられた人形には全て「伊勢竹河」という人名が書かれており、顔にヒゲがあることから男性と判断できます。残り半分は緑釉壺の中に桃の種や羽と一緒に入れられていました。前者よりも全体的に小さく、顔の表現は女性と思われます。胴部に書かれた人名は「伊勢宗子」、「秦奈良子 又名粟日」、「伴廣富」の3種類があります。それぞれ6枚、17枚、13枚にその名前が確認できました。このように同じ人名が書かれた人形が何枚もまとまって見つかった例も初めてです。

この人形は同じ祭祀に使われた後、一括して捨てられたものと考えられ、人名に見られる4人は同じ屋敷で暮らしていた家族であった可能性が高いと思われます。今回の人形は、縛ったり木釘を打ったりと、一見すればまるで呪いの人形のように見えますが、これはあくまで束ねるための行為であって、本来人形は穢れを祓ったり、病気の治癒を祈って自分自身の形代として作られる場合が多いようです。人形が捨てられた時期は、「嘉祥元年」（848年）と書かれた石より上で出土したので、9世紀の中頃から後半と推測されますが、この時期は甚に天然痘などの病気が流行していた頃で、この人形もそうした病氣平癒のために使用されたものかもしれません。



束ねられた人形